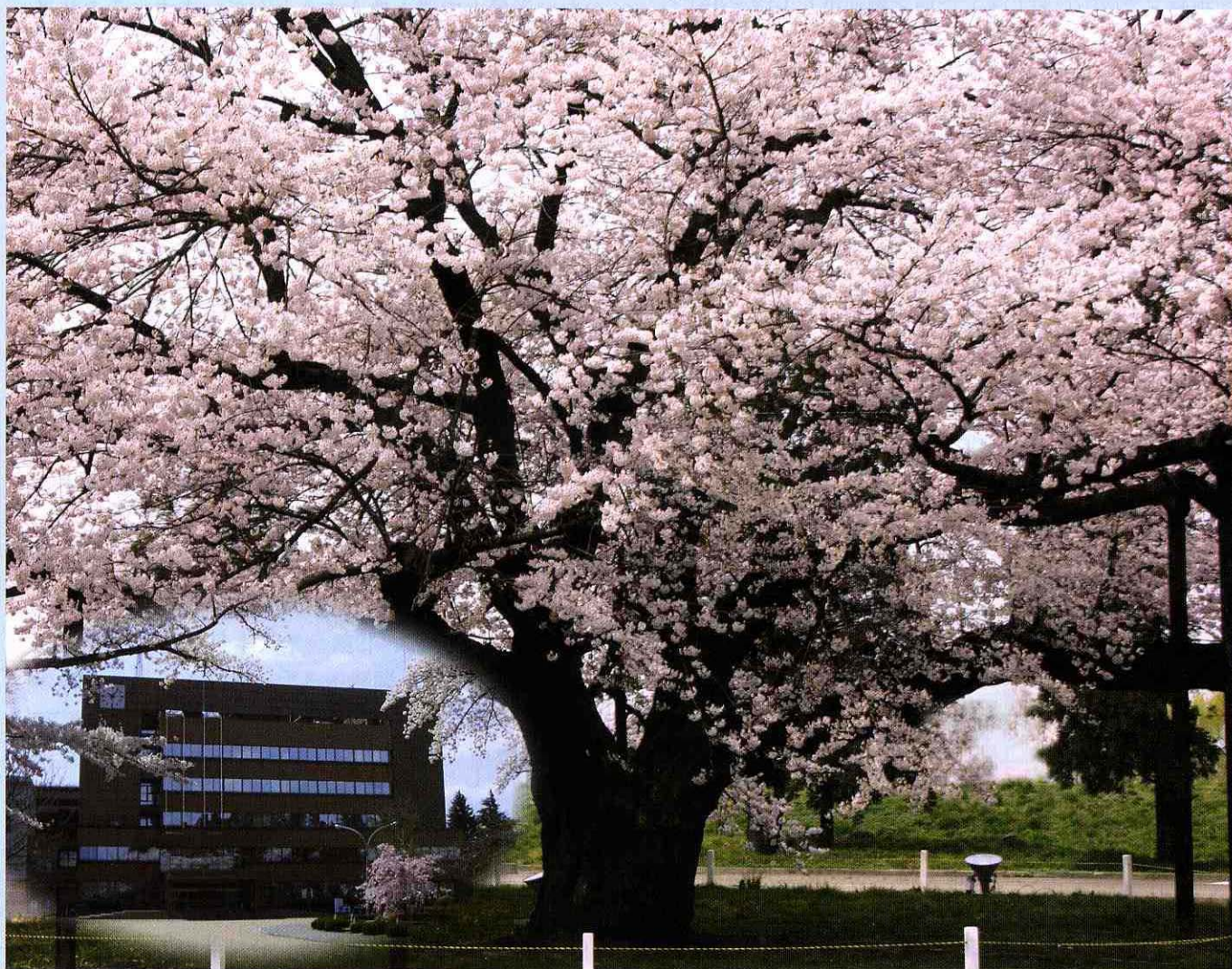


日本大学工学部

校友会報

第71号

平成20年3月1日



INDEX

- ごあいさつ2
- 平成19年度第50回通常総会報告3
- 第27回「母校を訪ねる会」を開催4
- 日本大学工学部校友会連絡会・支部長会の開催7
- 「母校を訪ねて」7
- クラブOB・OG会報告13
- 支部活動報告15
- 校友レポート19
- がんばり記21
- NEWS 22
- 寄付者名簿23
- 通常総会・母校を訪ねる会の案内24





日本大学工学部長
小野 沢 元久

2008年の早春を迎えられ、校友の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げますとともに、平素から大学へのご理解とご協力に対しまして厚く御礼申し上げます。

アメリカの未来学者ジョン・ネイスピッツが、やがて社会は大きく変わるだろうと予測したように、今、世界はめまぐるしく変化しています。確かに日本の社会も高度情報化、グローバル化、少子高齢化など大きな流れの真っ只中にあり、特にインターネットの普及は政治・経済・教育などのあらゆる分野に革新的な変化をもたらしています。とりわけ経済においては構造的な転換が起こりつつあります。大規模な経済活動より小規模な経済活動が活力をもつようになってきました。物を作って売するという産業の時代から情報やサービス、知識、文化などを売ることが経済の主流に繋がる時代への変化であります。

アメリカの経済誌「フォーチュン」の優良企業トップ500を見ると、70年代は大企業が7割を占めていたのに対し、最近では、従業員20名に満たない小規模の企業がアメリカの経済を牽引する原動力になっています。更に先進工業社会では、知識生産が国民総生産の50パーセントを超えており、知的労働力が全労働力の30パーセントを占めるともいわれ、確実に私たちの労働力や生産様式

にも大きな変化をもたらしています。このような傾向は、将来約束された中核的・専門的労働力と熟練が不要な使い捨て単純労働者への職業の分化であり、グローバル化による競争の激化がそれを加速させております。企業は能力のあるものを選んで、中核的、専門的社員として優遇し、それ以外は、アルバイト等の保障のない労働力で置き換えようとしています。その結果として非正規の労働者が増大し、それがフリーターを生む原因にもなっています。

新しい時代の潮流は、従来の日本の社会システムを確実に変えてきています。

今まで当たり前だったことが、この先も通用するとは限りません。このような時代を生き抜くためには、固定観念にとらわれず、不確実性を前提にしながら、自らの意思決定を柔軟に変えていかなければなりません。国も企業も教育機関も考え方・方針・組織の全てにおいて明日を優先しなければなりません。昨日の継続の上に明日があることを期待できません。だからこそ、常に新しい知識、新しい技術を習得しなければなりません。生涯学習社会の到来であります。

工学部はこのような社会背景を見据え、社会に求められる大学を目指して全力を傾注していく所存です。

最後に校友の方々の変わらぬご教導、ご支援をお願いし、併せて各位のご健勝とご活躍を祈念申し上げます。



校友会会長
加藤 木 研

日本大学工学部校友会の校友の皆様には新しい年を迎え、如何お過ごしでしょうか。去年は異常気象の影響でしょうか、暑い夏を過ぎました。冬はどうなるのでしょうか。今原稿を12月に書いておりますので、これから寒い冬なのか暖かい冬なのか解りません。皆様のお手元に「校友会報」が届く頃には結果が出ていることでしょう。

さて、去年の経済を顧みますと、景気は緩やかに回復しているとのことでしたが、地方にありますと、中央が潤っているだけで、まだまだ潤いが感じられません。日本全体が早く回復してくれることを願っております。

また、去年は中越沖地震がございました。校友の中でも被害に遭われた方がおります。お話を聞きますと相当大変だったようです。被害の回復を心より願っております。

校友会の活動としましては、昨年度に新たに「東東海

支部（ひがしとうかいしぶ）」が結成されました。この支部は、静岡県を中心とした支部です。結成大会には約100名の会員が出席しました。本部としましては、各支部の活動を活発化していただくために、出来るだけの援助をしたいと考えておりますので、宜しくお願いします。各支部の会員の方、特に若い方の参加を切にお願いします。

また、私たちの支部の中には「アカシア教育研究会」という支部がございます。この支部は工学部出身の、主に高校の先生方で作っている支部です。在学生で教員を目指している学生に対する援助、高校生に対する工学部のアピール等、いろいろな活動を行っています。

尚、校友会としまして、本年度以降の卒業生に対し、通信費として、一律5,000円のご協力をお願いしております。これは将来、通信費の増加が予想され、予算上足りなくなるからです。

最後になりましたが、2期6年にわたり、会長職を全うさせていただきました。有難う存じます。これも一遍に会員の皆様のご協力の賜です。本当に有難うございました。

平成19年度 第50回通常総会報告

平成19年4月21日（土）、午後2時より第50回目となる日本大学工学部校友会通常総会が開催された。本年は3年に一度の東京開催であり、市ヶ谷の日本大学会館が会場となった。関東支部の協力も得て100名にもおよぶ校友が集結した。

加藤本研会長（電12）による開会の辞が述べられ、総会出席者から議長に小山田克己氏（土5）、議事録署名人に長澤幸二氏（電20）、田村賢一氏（機30）、書記に鈴木廣氏（土19）、相原茂氏（土24）がそれぞれ選出され、議事にはいった。

鈴木守総務委員長（電16）から「平成18年度会務報告」、水上崇財務委員長（建22）から「平成18年度一般会計・特別会計収支決算」がそれぞれ報告され、渡邊信一会計監査（土21）から監査報告がなされた。さらに両委員長より「平成19年度事業計画」および「平成19年度一般会計・特別会計収支予算」が提案され、各々に質疑討論の後、賛成多数で承認された。ついで渡澤正典幹事長（建14）より「東海支部静岡支会の支部昇格承認」の説明と、「会則改正」の主旨及び改正点の説明がなされ、審議の結果、承認された。更に、各支部長による支部活動、近況の報告がなされ、閉会となる。

総会終了後、日本大学会館2階大講堂において、小嶋勝衛総長をはじめとする本部関係者、小野沢元久工学部長をはじめとする工学部関係者さらに他学部校友会会長・代表者の御臨席をいただき盛大に懇親会が開催された。

また懇親会の場において、工学部校友会から工学部へ寄贈品「集合用パイプ TENT10張」の目録を授与した。



平成18年度一般会計収支決算書

歳入					単位：円 △…減	
款 項	種 目	予算額	決算額	比較増減 (予算額-決算額)	付 記	
会 費	1.終 身 会 費	6,000,000	6,350,000	△ 350,000		
	2.入 会 金	32,900,000	33,068,000	△ 168,000		
	計	38,900,000	39,418,000	△ 518,000		
繰越金	3.前年度繰越金	2,029,985	2,029,985	0		
	計	2,029,985	2,029,985	0		
交付金	4.校友会正会員交付金	120,000	98,400	21,600		
	計	120,000	98,400	21,600		
雑 入	5.預 金 利 子	3,000	15,520	△ 12,520		
	6.名 簿 代 金	0	18,000	△ 18,000		
	7.雑 収 入	△ 18,000	405,000	△ 257,985		
	計	150,015	438,520	△ 288,505		
合 計		41,200,000	41,984,905	△ 784,905		
歳出					単位：円 △…減	
款 項	種 目	予算額	予算現額	決算額	比較増減 (予算額-決算額)	付 記
事務費	1.給 料 手 当	6,000,000	6,000,000	5,669,567	330,433	
	2.法定福利費	600,000	704,188	704,188	0	繰上30から ¥104,188
	3.福利厚生費	200,000	200,000	30,344	169,656	
	4.旅費交通 費	1,200,000	200,000	187,020	12,980	繰上27へ ¥1,000,000
	5.交 際 費	1,500,000	1,500,000	1,500,000	445,435	
	6.事務用品費	400,000	400,000	234,272	165,728	
	7.備 品 費	300,000	300,000	264,380	35,620	
	8.印刷製本費	300,000	300,000	114,450	185,550	
	9.通信運搬費	350,000	350,000	317,937	32,063	
	10.修繕維持費	150,000	150,000	49,875	100,125	
	11.分 担 金	670,000	670,000	670,000	0	
	12.電算維持管理費	450,000	450,000	238,000	212,000	
	13.支払手数料	50,000	50,000	38,790	11,210	
	14.雑 費	100,000	100,000	5,479	94,521	
	計	12,270,000	11,374,188	9,578,867	1,795,321	
事業費	15.組織対策費	2,700,000	2,705,570	2,705,570	0	繰上30から ¥5,570
	16.会報発行費	5,000,000	5,000,000	4,418,430	581,570	
	17.会員名簿管理費	2,000,000	1,000,000	750,459	249,541	繰上27へ ¥1,000,000
	18.式 典 費	4,400,000	4,400,000	3,026,290	1,373,710	
	19.母校訪問費	600,000	600,000	530,572	69,428	
	20.負担補助援助費	5,400,000	5,400,000	5,400,000	0	
	21.新規事業費	100,000	100,000	0	100,000	
	計	20,200,000	19,205,570	16,831,321	2,374,249	
会議費	22.総 会 費	650,000	650,000	588,681	61,319	
	23.役 員 会 費	61,319	500,000	300,032	199,968	
	24.連絡協議会費	500,000	535,150	535,150	0	繰上30から ¥35,150
	25.旅 費	3,200,000	3,295,420	3,295,420	0	繰上30から ¥95,420
	計	4,850,000	4,980,570	4,719,283	261,287	
繰出金	26.職員退職給付積立金 特別会計繰出金	100,000	100,000	100,000	0	
	27.学生支援基金 特別会計繰出金	2,500,000	4,500,000	4,500,000	0	
	計	2,600,000	4,600,000	4,600,000	0	
積立金	28.積 立 金	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	
返済金	29.返 済 金	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	
予備費	30.予 備 費	1,280,000	1,039,672	0	1,039,672	繰上27から ¥240,328
	計	1,280,000	1,039,672	0	1,039,672	
合 計		41,200,000	41,200,000	5,729,471	5,470,529	

歳入額 41,984,905円
歳出額 35,729,471円
差引残額 6,255,434円を翌年度へ繰り越しとする。



「母校を訪ねる会」第27回を開催

10月28日曜日、台風一過の秋晴れの中、第27回「母校を訪ねる会」が盛大に開催され、大勢の校友が往時を過ごした工学部の土地を訪れました。

対象学年は、第5回、第15回、第25回、第35回の卒業生で、総勢213名の参加となりました。皆様卒業後の工学部の変貌と現状を目の前に、再会の喜びや在学中の昔話を語り合いました。前日から同窓会を開いていた方も多く、勢いそのまま受付の50周年記念館ロビーは一時大勢の熱気にあふれました。

午前11時半には、学年学科ごとに写真撮影を行い、正午からは懇親会が催されました。懇親会は現在の学生食堂で行われ、小野沢元久工学部長、加藤木研校友会長の挨拶に始まり、乾杯を依田満夫工学部次長、校友代表挨拶を土木5回卒大浦弘夫氏、建築15回卒の小野平一氏と、在学当時の思い出や現状を交えた貴重なお話をいただき、会は和やかに進行していきましました。応援団の演舞も披露され、工学部卒業生と母校のさらなる発展を願って、校歌を高らかに斉唱いたしました。

あらためて、工学部卒業生の絆の強さと連帯感を実

感いたしました。佐藤平先生による万歳三唱に閉会となるまで、皆様まるで学生時代に戻ったかのように賑わいました。閉会の後、皆様、また10年後と、再会を誓い合い、それぞれ帰路につかれました。

また、今年も、懇親会のお借りしまして、校友会より工学部へ「新教室棟建設寄付金」として、500万円を贈呈致しました。校友会から在校生への支援の一つとして役立てて頂けたらと願っております。

30周年記念館に於きましては、昔の授業で使われていた機材や、今は取り壊された学舎の写真、当時の風景等を展示した資料室「工学部60年の歩み、写真と資料展」を開催しておりました。そちらもたくさんの方が足をお運びくださいました。この盛況は、皆様の母校工学部と校友会に対するご支援のものと深く受け止めております。これを機になお一層、母校との絆を深めて頂ければと願います。

来年、第28回の「母校を訪ねる会」にも、対象学年にかかわらず、多数のご参加をお待ち申し上げます。（詳細は裏表紙に記載）



第27回 母校を訪ねる会(第5回・昭和31年度卒、第35回・昭和61年度卒) 平成19年10月28日



第27回 母校を訪ねる会(第15回・昭和41年度卒) 平成19年10月28日



第27回 母校を訪ねる会(第25回・昭和51年度卒) 平成19年10月28日

校友茶会の開催

「母校を訪ねる会」の開催時に、今年から校友茶会と称す、お茶会を開催いたしました。表千家、佐藤宗珠先生を席主に、来校された皆様が往時をしのいで学内を散策される道すがら、ふと足を止めて楽しく語らう場を、と企画されたものです。

普段ふれることないお茶の席に、皆様大変興味を持って頂き、総勢200名近くの方々がお茶を堪能されて

いました。大変ご好評をいただきましたので、次回も開催する予定です。母校を訪ねる会でのお越しをお待ちしております。また、この度お世話になりました茶道スタッフの皆様、茶道部OB、田中敏夫氏には、大変お世話になりました。ありがとうございました。

校友茶会報告

茶道部OB 田中敏夫(建築19回卒)

校友にとって母校工学部は、智と技の殿堂で、皆さんは一生の誇りと思っている。しかし、創造性なき科学が、社会を豊かにできなかったことも知っています。

学生諸君の創造性を育むために、校友会としては、日本の文化に接する機会を提供して、日本人の感性を起動し、日本人の思考回路を復活させることが、良策の一つであると判断した次第でした。そこで、かつての日本大学工学部表千家流茶道部のOBや市中の関係者などにご支援を戴き、時は学部祭を選び、学部祭行事であります学内展示の一環として『母校を訪ねる会』の会場入口ロビーで「校友茶会」を開催しました。

茶席には、校友はもちろん教職員の方々、それに学生諸君も訪れ、総勢220人ほどの多さに達しました。印象的であったのは、茶を頂きながら旧友との語らいに寸時を惜しんでいる校友諸氏の姿や学生諸

君の好奇に満ちた眼差しでありました。そして極めつけは、10人が一団となって茶席についた應援団の諸君が、退場する場面で横一列に並び、席主の声で並んだ水屋を預かった20人のスタッフの前で、丁重に点前の御礼をのべたことでありました。

まさに日本文化の、礼に始まり礼に終るの具現であり、一同には感動の一瞬でありました。

次回も茶会を開催する予定なので、来学の折には是非お立ち寄り下さい。



平成19年度日本大学工科系校友会連絡会・支部長会の開催

猛暑の続いた昨夏、平成19年9月1日(土)、日本大学工学部にて「平成19年度日本大学工科系校友会連絡会・支部長会」が開催されました。本会議は理工学部、生産工学部、薬学部そして工学部の校友会で結成される日本大学工科系校友会の役員や支部長が、年に一度当番校のキャンパスに集まり、各々の校友会の活動・近況報告、意見交換を行う場であります。平成19年は4年に一度の工学部開催ということで、各学部校友会の主だった役員や支部長が郡山に集結しました。

11時30分より行われた連絡会では、各校友会長の挨拶・近況報告に始まり、各々の会を運営していくうえでの問題や、今後の校友会のあり方などの意見が交わされました。引き続き13時から行われた支部長会では、

支部長や支部の代表者によって、近況報告がなされました。ほとんどの支部で、昨今は若い世代の校友会活動への参加者が少なくなってきたことを危惧する意見がだされました。この辺りが校友会活動を行ううえでの今後の課題となりそうです。

その後15時30分より62号館2階のカフェテリアにて懇親会が催されました。小野沢元久工学部長、石井進生産工学部長、安西偕二郎薬学部長、越智光昭理工学部部長の各氏から挨拶を賜り、佐々木一巳理工学部事務局長の乾杯で懇親が始まりました。懇親会は盛大かつ和やかに進み17時に閉会しました。

最後に工科系校友会連絡会・支部長会に出席された諸氏に感謝申し上げます。



平成19年度母校を訪ねる会第27回を開催



母校を訪ねる会

土木5回卒 大浦 弘夫



平成19年度「母校を訪ねる会」開催本当におめでとうございませう。この度、このように大勢の皆様方にお目にかかれ本当に嬉しく、厚く御礼を申し上げます。

さて私は第5回卒、つまり卒業以来50年になります。振り返れば第5回卒と言えば校舎はまだ航空隊の木造兵舎でした。冬はストーブを掻き回しながら勉強しました。亦、先生方は大変厳しく熱心に教育して頂きました。数学の広川先生、小林巖先生、英語の岡部先生、応用力学の加藤先生、港湾測量の新田先生、卒業してからも電話や手紙で教えて頂

いた木村喜代治先生など50年経っても昨日のように覚えております。就職後は日本大学の名を汚してはならないと一生懸命努力しました。本日ご参加の皆様方、卒業年度は違っても、このキャンパスで学んだ同じ工学部の卒業生です。「青春に夢あり、宇宙に眞理あり」のかけがえのない青春を共有した仲間です。これからも大いに頑張りましょう。茲に大変ご多用のなかご臨席賜りました小野沢工学部長さんをはじめ、諸先生方並びに加藤木校友会長さんと役員の皆様方に対し深く感謝を申し上げる次第でございます。結びに、日本大学工学部の限りないご繁栄とご参会皆様方のますますのご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げまして第5回卒業生の挨拶と致します。本日は誠にとおめどうございます。



「母校を訪ねる会」に想う

電気5回卒 西田 修二

「母校を訪ねる会」当日は、台風（20号）一過、快晴に恵まれ誠にラッキーであった。

私は以前に一度、今は亡き本間磐先生の古稀祝賀会（昭和61年）出席の為本学を訪れている。更に20年を経た今日、キャンパス内は、近代化されて昔日の面影は無く感慨一入である。僅かに残る「北心寮跡」石標前で、思い出にと、八木幹事に写真を撮って貰った。

さて、50周年記念館で受付を済ませたが、電気5回卒の出席者は、小生只一人であった。誠に残念であったが、救いは北心寮で4年間起居を共にした方々と、再会出来た事である。中でも、佐藤謙内君（土木）、山崎卓君（建築）等、皆さんの元気な姿に接し何よりも嬉しく、会話も弾み楽しい一時を過ごす事が出来たのは幸いでした。受付後、校友会八木幹事（最後の北心寮生）には、親切に色々のご案内を頂きました。感謝申し上げます。

キャンパス内は、懐かしく思い出多き木造校舎は、影も形も無く近代的な教室棟や実験棟、研究センター等その整備充実ぶりは、30号記念館での往時を偲ぶ歴史展示と対比し、その余りの変わり様に言葉もない。

更には学部長のお話や、広報誌などによれば、ロハス（環境・健康・持続可能な社会）な工学研究活動に取り組む研究室が、90に及ぶという。グローバルな技術者の育成に向けて学部挙げての活動の一端を知り、非常に感銘を受けました。更なる充実発展をされますよう、心より祈念申し上げます。

半世紀ぶりに訪れた我が母校の「温故知新」姿と心両面から、思いつくままに雑感を述べさせて頂きました。

最後に「母校を訪ねる会」を企画運営された学部並びに校友会関係の皆様、ご配慮に感謝申し上げ、併せて本学の益々の発展と、学部教職員並びに校友各位のご健勝を祈念申し上げます。



母校を訪ねる会に参加して

土木15回卒 船越 政明

私たち同期生は母校を訪ねる会の前日、全国各地からこぞって参集し、矢吹ゴルフ倶楽部でのプレーを予定していたが、日本列島をスライスしていった台風と、前線の影響を受けての一過性の大雨で、あいにくゴルフは中止となってしまった！！がしかし、そのおかげで、久しぶりにあった同期の面々と長時間にわたる懇談ができ、昔の話に花が咲き卒業してから40年も経ち、還暦を過ぎて久しい面々の、顔も心も確実に学生時代に戻っていた！！

この後小林秀一、石井和樹両先生を迎えて、磐梯熱海温泉ホテル華の湯での懇親会では、さらにエスカレートして、毎年、東京、北海道等々で会おうなどの声も飛び交うなど、大いに盛り上がり一同腹から笑いこけ、涙で声もしわがれるほどで大変楽しい時間を過ごすことができました。



次の日、10月28日（日曜日）は、同期の参加者もさらに増え母校を訪ねる会に出席したが、北桜祭も重なり多くの人で賑わい活気に満ち溢れていた。

また工学部キャンパスは時代を反映してか、絶えず先端技術を歩む使命を受けて、突き進むかの様に、かくも新しく近代的な中にも威厳と、誇りに満ち溢れた様相で一杯であり、昔の面影はなく目をみはるものがあった。その驚きと感動の中、学部中央棟正面にて、私たち土木工学科の恩師で、80歳にならんとする木村喜代治先生を囲み、また次に15回卒業生全員で工学部の先輩である小野沢元久学部長を囲み記念撮影ができ、皆々大満足そうな顔をしていた。こうして今回の学部創設60周年、我々卒業40年という節目の年に母校を訪ねる会に出席できた事は大変喜ばしく、永遠に記憶に残るものとなった。

これからも、ますますIT産業やインターネットがどんどん普及しグローバル化が加速的に進んで参ります。特に中国、インドの台頭はめざましく、目を見

放せないものがあります。是非、我が工学部としても、これらに負ける事のない様に、これからも、伝統である工学部持ち前の、フレキシブルで粘り強い不屈の精神と、高い技術力を有する優秀な人材を輩出し、地元をはじめ日本全国いや世界に発信して頂きたいものと考えております。老婆心を話して参りましたが、工学部の今後の益々のご発展、恩師諸先生、そして同期の面々の、いつまでも、いつまでもご健勝ありますことを、心からご祈念申し上げ母校を訪ねる会の報告とさせていただきます。



母校を訪ねる会

建築15回卒 八町 雅康

突如(?)発生した台風20号が、あれよあれよと云う間に接近して来る。後日、記録をみると27日の昼は、まだ東京の南海上に位置していた。いつもならこの辺りから東に進路を変えるのだが、どうもその様子もない。九州から飛行機で来ると云ってたA君、北海道からはB君とC君が来る。同級会の時刻には風も強くなってきたが、風雨の中、皆元気に集まってくれた。40年も経つと、当時お世話になった先生は大学にはおらず、誰もがお世話になった黒田先生と小栗先生に電話で出席をお願いした。また学科を代表して若井先生(学科主任)が出席下さって総勢34名による同級会となった。他に外山先生と橋本先生にもお願いしたがテニスや射撃の予定があって残念だったが、ともにご活躍の様子、何よりでした。



主任の歓迎の挨拶に続き黒田先生の乾杯のご発声で会は始まった。「話に花が咲く」と云うがこんなことを云うのだろう。卒業して40年。夫々の道で活躍して来られた様子がありありと伝わって来る。会話のあちこちに「定年」を感じさせない、自信に満ちた会話であふれていた。

翌日はうそのように晴れ上がった母校へ。折りしも学部祭の最中。後輩たちが元気に飛び回っている姿を

見て、「昨日の雨は気の毒だったな～」との優しいお言葉。さすが先輩!



「母校を訪ねる会」に参加して=先輩力の活用=

建築15回卒 小野 平一

当日の天候は前日からの台風がらみの風雨が嘘のように晴れ渡り「みちのく」の素晴らしい秋の好日でした。その際、挨拶をさせて頂きましたので、その内容を紹介します。

まず40数年前、18~19歳の生意気な青年を教育し、社会に送り出して頂いたことに感謝致します。お陰様で社会にでて40年間働くことができました。ありがとうございました。

入学当時キャンパスの建物は殆ど木造で鉄筋コンクリートは教育棟と寮くらいでした。それが今回訪問しますと、木造建物はなく、すべて近代的な建物に変身していました。感動しました。東京からの電車の所要時間も3時間から1時間半に短縮され、技術の進歩には驚かされます。恩師の名物先生、英語の岡部先生、解析の小林先生、構造力学の倉田先生などの面影が思い出されます。

また、今回は大先輩の5回生にもお目にかかりました。これまでのお仕事に対するご慰労とご健康のお祝いを申し上げました。我々も健康に留意して1人でも多く次回の当会に参加することをお誓いしました。

一つだけ提案をしました。それは当学部には立派な卒業生が沢山いらっしゃいます。その「先輩力」の活用です。教職員、現役学生、卒業先輩が一緒になって母校を盛り立てましょうと。我が愛する「日本大学工学部」のますますの発展を祈念して挨拶としました。

懇親会終了後、郡山から東京までの新幹線のなかで級友と懐かしい話、苦勞話をしておりましたら、あっという間に東京に着きました。再会を約束してそれぞれ家路に別れていきました。このような素晴らしい会合を企画、実行して頂いた工学部校友会事務局の方々に心よりお礼申し上げます。





「母校を訪ねる会」に参加して

機械15回卒 野口昌孝

10月27日、20年ぶりに母校を訪ねるため、静岡を出発した。昭和42年3月卒業以来、何年頃からは忘れたが、仲の良かった級友10人と2～3年に一度同級会を開催してきました。今回は母校を訪ねる会に合わせ、宮下君の住む会津若松に集まり、前夜祭を行い、翌日母校を訪ねることとした。幹事は永久幹事である、私と同じく静岡に住む古橋君が、毎回行うことになっている。今回は愛媛に住む戸田君の奥さんも参加し、難波、藤江、安藤、大福君も出席、前回の京都開催より3年後とあって大いに盛り上がり、多少飲み過ぎた級友もいたが、楽しい前夜祭となった。



翌朝、前日の雨も上がり好天に恵まれ会津若松駅より郡山へと出発。郡山駅より直行バスで社外の風景の変わりように驚きながら15分、正門へ到着。北桜祭の出店の並ぶ中を受付のあるハットNEへ、若い女性の多いことに驚き、我々の在学時に校内で女性を見かけることなど殆どなかったことを思い出し、今の男子学生がうらやましい限りである。受付後、同期の仲間と久しぶりに再会し、互いの近況や昔話に花が咲き、三々五々記念撮影に。撮影終了懇親会に出席。学部長、校友会長の挨拶に現在の学校の状況、校友会活動の状況を伺い、母校のますますの発展を感じ、大変嬉しく思いました。懇親会も大変盛り上がり、應援団の指揮による校歌、エンジニア校歌の斉唱で学生時代を思い出し、いつまでも若きエンジニアでありたいと思った次第です。

体の続く限り現役が目標の私にとって、元気を与えられた、母校を訪ねる会となりました。この機会をくださった工学部、校友会の皆様に感謝し厚く御礼申し上げます。最後になりましたが、私の現在住んでおります静岡県には、工学部校友会の組織として、東東海支部（静岡アカシア会）があります。毎年総会、懇親会を開催しております。現在静岡県内には3,500名程

度の校友がいるとのこと。平成20年も静岡県東部地区で（8月頃）開催される予定となっています。この校友会報をご覧になった静岡県内校友の多数の参加をお願いします。



昔の若人は集まった

電気15回卒 中澤 和宏

ニセアカシアの花が散る学び舎の窓、寒風が吹き抜ける木造の古教室…。

40年前、希望に満ちた我々はこの様な学園をあとにした。あれから人生の風雪に耐えた顔が8人、浦島太郎の気持ちで、10月28日母校を訪ねた。

前日迄の悪天候はまるで我々の集まりを祝福するかのように晴れわたり、折りしも学園祭の最終日を盛り上げていた。

会に参加する前、郡山市内をしばらく散策、40年前飲み歩いた街はファッショナブルな若者が闊歩し、青空以上のマブシさである。

同期生に会うと皆同じ行動の様子、年寄りには皆同じか？懇親会場に着く。確かこの辺はグライダー滑走路だったろう。

モダニズムの会場での平均年齢？歳かの懇親の時間、暫くは昔の面影を思い出すのに四苦八苦、会話を重ね、思い出話を肴に酒を酌み交わすうち空気は40年前に（なつかしい！）。

日曜日にもかかわらず出席して頂いた教授及び関係者の皆様にも今の大学生活を伺い、設備の拡充、引く手あまたの就職状況、ご苦勞をねぎらい、今後更なる活躍を皆で祈念。

そのうち應援団（らしくない）のエールで酔いが醒め、学部長の前向きな挨拶で又入学したい気持ちになり、久しぶりの万歳三唱でお開きとなった。

数時間でしたが、皆々若人に戻り、又の再会を期待し帰途に着いた。





母校の発展に感激

工化15回卒 稲葉孝夫

平成17年同級の有志が集まり『我々も平均年齢60歳を迎えるので、今までは忙しく不定期だったクラス会を毎年行おう』という話がまとまりました。

以来17年度、北海道・18年度、山形そして今年は『母校を訪ねる会』に合流しようということになりました。

10月27日(土)、季節外れの台風が太平洋を北上する強い雨の中、磐梯熱海の八景園にはせ参じた者15名。北は北海道から南は滋賀県に渡り、卒業以来40年振りから去年のクラス会以来の再会者までおりました。

不思議なもので会った瞬間一瞬の戸惑いもありましたが、飲むほどに記憶も蘇り大いに盛り上がり深夜まで昔話に花が咲きました。

翌28日(日)、昨日の大雨は何処へやら絶好の快晴。母校を訪ねる日、旅館で用意してもらったマイクロバスは9時出発の予定だったが8時半に早めてもらう入れ込みようでした。

すっかり様子も変わった郡山市街を通過し、懐かしい阿武隈川を渡り母校に到着する。



受付を済ませ早速40年前の面影を探しに学内を歩く。あった、あった。1号棟・2号棟・図書館そして卒業直前に完成した体育館が残っていました。それ以外は新しく立派な施設が並び見違えるほどの環境になっておりました。

30周年記念館に入ると、学部の子き貴重な写真・資料などが展示されており懐かしく拝見しました。

そして高木先生に再会。退官され80歳になられる先生はわざわざ私達のためにご来校いただいたそうで大変感激をいたしました。

また、昔学生自治会が運営していた北桜祭も、今は自治会もなく模擬店の食べ物販売ばかりが目につき展示が少なくなっていたのが残念でした。これも時の流れか。

懇親会の中では今まで中断されていた応援団が復活

しエンジニア校歌を披露していただき胸熱く唱和いたしました。

どの学部にも負けない素晴らしい環境をもった工学部の益々の発展を祈念しつつ、またこのような機会を作っていただいた学部ならびに校友会の皆様から心から感謝し母校を後にいたしました。



風景

建築25回卒 水上 朗

30年の歳月はキャンパス内の目に映る全ての風景を変えていた。

多感な4年間を共に過ごした学友との再会は、シニアグラス越しに胸の名札を頼りに、記憶の糸をたぐり寄せながら、少し間をおいてからの笑顔となった。

恒例の中庭での記念撮影の後、50周年記念会館でパーティが行われ、久々の再会の祝杯を交わし旧交を懐かしんだ。

確かに歳月は全てを変える。建築学科卒の歯科医師もいるし、海外で活躍している学友もいて、社会の中核を担っている。教えを頂いた先生方も、ほとんど退官されたと聞いた。

キャンパスで談笑する学生たちは、底抜けに明るく、憧れだった女子学生だっていっぱいいるけど、ユニホーム代わりだった実験用白衣姿はみあたらない。

建物は明るく近代的で、我々が学んだボックスカルパートの様な校舎とはまるで別世界。軽い嫉妬心さえ覚える始末である。考えてみれば、親の言うことを聞かない我々の子供たちと同じ世代なのだ。

楽しい一時が過ぎ、10年後の再会をと別れたが、次回キャンパスの風景が、学友が、自分自身が、どう変わっているのか楽しみにしたい、と思いつつ帰路についた。

個人的なことですが、私は俊英寮の近くに住んでいて、大学は犬の散歩コースで、キャンパスの移り変わりは一番良く知っているのですがね。





まぶしい記念撮影

電気25回卒 原田 智



電気25回組の名幹事社長高田孝太郎《北空港》。ポトンガホテルに詳しい仙田博久《泳げたいやきくん》。東北電力勤務穂積一夫《新潟ブルース》。花巻の阿部電機商会代表取締役阿部勝俊《池上線》。電気工事業福島高野博光《酒よ》。

札幌から飛行機で来た田中典嗣《大阪ラブソディー》。神明電機富岡製造開発センター長原田裕嗣《初恋》。須賀川柴康二《君だけを》。関工パワーテクノ福島事業所長鈴木四郎《氷雨》。川北電気工業東北支社長長場昭衛《みだれ髪》。前日の10月27日清稜山俱樂部に宿泊し、堀の酒“立山”で盛り上がる。

28日には、母校を訪ねる会に参加、そこに富山から車で来た堀幹。伊勢崎市から金井秀夫。双葉郡から神永卓。北上済生会病院総務課長鈴木博。出席予定で須田務（朝霞市）田村雅昭（横浜市）は残念ながら欠席でした。昨日の大雨とは打って変わって晴天に恵まれ、北桜祭の中庭で記念撮影、食堂では恩師の皆様、校友の皆様にお会いできました。

電気系では恩師の松塚勇先生、長澤幸二先生が来られました。中には30年ぶり再会の人もおり「若きエンジニア」に感動しました。

《 》内はカラオケで披露した曲です。敬称は略させて頂きました。



時間を越えて～縁尋機妙～

機械35回卒 安彦 現

今回思いがけず「母校を訪ねる会」のご招待を受け、卒業から20年もの歳月が経っていることを改めて知ることとなり、ただただ驚嘆の思いでありました。

さて、当日は一服のおもてなしを受け、和んだ心で学舎を散策すると当時の面影が所々に見られるものの、多くの建物が増え、生まれ変わったキャンパスには新たな息吹が入り込み、学生達も「北桜祭」の活気に満ち溢れておりました。最新の施設や設備が整ったキャンパス、今も確固たる姿勢でご指導くださる教職員の皆様を拝見致し、学生の学ぶべき環境が十分に整っていることを心より実感致しました。



また、久しぶりに仲間達と歩く周辺の町並みに、今も変わらずにある食堂やアパートを見ては、当時の思い出が次から次へと湧き出てきました。このときは、時間の空間を飛び越え学生時代へと瞬間に誘ってくれたようでした。恩師や朋友たちとの再会は、日常の慌ただしさから解き放たれ心の底から楽しめた貴重なものとなりました。

このような師友との繋がりをもてましたことは、まさに「縁尋機妙」であり偏に母校のおかげと心より感謝申し上げます。仲間達とは、毎年集まる会にしようとの話にもなり近い将来の再会を誓い別れを惜しみつつ、それぞれの帰途につきました。

終わりになりますが、このような企画をしていただいた関係各位の皆様方に心より感謝申し上げます。

また今後も母校並びに校友会のますますのご発展、さらに関係各位の皆様方のますますのご健勝とご活躍を心よりご祈念申し上げます。

母校を訪ねる会

スナッフ写真アラカルト



クラブ・OB・OG会報告

第8回 三九会

機械12回卒 小山 泰

第8回三九会（昭和39年3月機械科卒業）を平成19年10月28日（日）に箱根湯本で開催しました。

この会は夫々が立場上も少し余裕の出てきた平成6年11月の第4回からは、ほぼ3年毎の開催ですが、幹事の負担を考慮して、現地集合・現地解散を基本に、会員の気楽な親睦一筋で行っています。今までは単に「クラス会」と称していましたが、今回から「三九会」と命名して今後も続けて行くことにしています。



前回は、平成16年10月の我々の卒業年次が対象の「母校を訪ねる会」へ出席する機会に郡山研修会館で行いましたが、皆65歳以上になってきたので、今回は少し気張って名代の温泉地のホテルとなりました。

今回北は岩手、南は大阪の遠方からも出席があり20人が集まりました。当日は、良い天気でしたが10月の末なのに木の葉はまだ青く、紅葉には早すぎて、近年の温暖化の影響なのだろうか心配する向きもありました。

前回以降で亡くなられた方や身内の悲しみに遭われた方などもあって、元気に過ごせることの有難さを感じもしました。

宴会では、食べる程に飲む程に各自近況報告や心情を語り、差入れ持込み飲物の自慢話もあり、会員の坂野教授からは、最近の学部・学生についての報告話があって、在学時代を思い出し懐かしいひと時でありました。宴会の前後にはゆっくり温泉に浸って気分の癒しもできました。

二次会は部屋に飲物・つまみ類を持ち込んで、宴会の続き話から最近の世情を嘆き、政治を憂い、議論風発、深夜まで思い出話、自慢話に花が咲きました。

翌日は朝食後に再会を約して散会。一部有志は箱根園回りで帰宅。卒業以来初めて参加の方もあり盛会でした。「この歳になると仲間は減ることはあっても増えることは難しくお付き合いは大切にしたい」という思いを述べる方が居りました。この会がそのような方のお役にもなれば幸せと思っています。

三九会連絡先 幹事長 橋本 壽

電話045-893-5902 携帯090-1457-1705

第8回管弦学部OB・OG会総会は、 第57回北桜祭の郡山で開催

電気12回卒 桃井 忠男

第8回総会は、平成19年10月27日（土）、郡山ホテルハマツで開催し、翌日は北桜祭で管弦学部員の演奏を楽しんだ。

千秋会長は「台風接近にもめげずに元気に再会ができ嬉しく思います。本日は現役代表も加わり21名が集まりました。会員数は現在192名を数えています。今年には会員名簿を見直して連絡が更に十分にできるようにし、この会が末永く続くように工夫したい。」と挨拶された。



総会参加の仲間

引き続き開かれた懇親会では、津川博保さんが「社会人時代はアリのようにながながつ働き、退職後しばらくはギリギリのように気儘に過ごしていたが、今音楽を再開しアリののように練習に取り組み、終わればギリギリのように過ごす、このアリとギリギリの生活が老化防止に役立っています。」と報告したので、仲間から喝采を浴びた。同席した現役の管弦学部員から「私は今後も音楽活動を続け、先輩と同じ気分を味わいたい」と決意を聞かされたので更に盛り上がった。

エキシビション演奏ではOB・OGの10名の仲間が菊花のような薫り高い演奏をし、更に北桜祭で現役20名がコスモスのような透明感あふれる演奏を聴かせてくれたので、2日間にわたり充実した総会になった。

OB・OG会員の年会費は2,000円で、振込先は、郵便口座で、口座名「日本大学工学部オケOB会」「記号10530」「番号65105371」です。卒業後の入会の連絡を待っています。

住所やe-mailアドレス変更、ご意見のある方は

広報委員・桃井忠男宛

FAX: 042-374-9395

e-mail: tadaomomoi@coral.plala.or.jp

にお知らせ願います。

(文責: 桃井忠男、写真は: 小川明彦氏撮影)

日本拳法部創部40周年記念式典

電気45回卒 日本拳法部OB会事務局長 早乙女道宜

工学部体育会日本拳法部は創部40周年を迎えたことを記念して平成19年10月13日、ホテルハマツに於いて、日本拳法部部长五郎丸英博教授、日本拳法連盟、各大学のOB会会長ら諸氏の御臨席のもと、工学部日本拳法部部員とOB合わせて総勢45名の参加により式典を執り行いました。式典当日、日本拳法部道場においてOBと現役部員による記念試合を行いました。現役部員は日頃練習の成果を発揮しOBは学生時代を思い出して健闘し合いました。

以前は賑やかだった武道館も静かになり、体育会離れに拍車が掛かったようにも思えました。しかし、我が日本拳法部は、この40年間で250余名のOBを送り出しております。これも工学部関係各位のご理解ご協力の賜物と、会報の紙面をお借りして深甚なる謝意を申し上げます。

私達は、今後も学生とOBとの連携を大切に、50周年、更にはその先へ邁進して参ります。また、部活動を通じて親交を得た他大学との友好関係も合わせて永続して参る所存です。



北海道支部活動報告

建築25回卒 北海道支部長 横関 一伸

平成19年度支部総会は6月8日（金曜日）本部より加藤木会長をお迎えして、北海道支部会員60余名の参加により例年通り、総会及び懇親会を行いました。

懇親会では、郡山での生活や思い出話に華を咲かせ、北海道からの卒業生が減っているのと、北海道の不況がどうしようもないと何か悲観的な話ばかり出ていましたが、みんな元気を出して、これを乗り越え、又、次回の総会での再会を誓い絆を又深める一日となりました。

10月19日には、札幌からは成田、片山の両副会長、金谷幹事長が参加し函館にて道南支部を行い、20数名が集まり、郡山での、下宿生活等の昔話や近況報告などに大変楽しいひとときを過ごしました。この様に北海道支部は8支部でも懇親会を行い同窓仲間の絆を確かめています。

20年度は同窓会総会及び懇親会を夏頃に行いたいと思ひ2月の役員会で相談致します。又、釧路で9月頃に支部懇親会（ミニ同窓会）を予定し、それには北海道支部長ほか役員も出席となっています。尚、北海道支部では北海道にお帰りになった方、又、新卒生の参加を歓迎しています。



関東支部活動報告

土木20回卒 栃木県校友会会長 宮崎 一義
土木36回卒 栃木県校友会事務局 篠崎 淳

平成19年10月20日（土）工学部校友会関東支部栃木県校友会の総会・懇親会を開催いたしました。当日は来賓として、福田富一校友会栃木県支部長（栃木県知事）、大島芳信栃木桜工会会長、佐藤勉衆議院議

員（土23）、手塚公敏工学部校友会副会長をお招きし、会員60余名の出席のもと栃木県青年会館（コンセーレ）にて開催いたしました。総会では、昨年度の事業活動報告・決算報告及び本年度の事業計画及び収支予算案が、活発な意見交換の中承認されました。



福田富一栃木県知事 日本大学校友会栃木県支部長

終了後は大学より、土木工学科：長林久夫教授、電気電子工学科：尾股定夫教授をお招きし、懇親会が盛大に行われました。乾杯のあと、長林先生、尾股先生より大学の近況をお伺いし、郡山での学生生活の思い出話に花が咲きました。最後には、恒例の日本大学の校歌を全員で斉唱し、盛況に終了することが出来ました。この場をお借り致しまして、ご尽力を頂きました方々に厚く御礼を申し上げます。今後に向けて、新しい校友会員の参加をお待ちしております。

北陸支部活動報告

建築17回卒 北陸支部長 笠井 隆

校友諸兄には益々ご活躍のことと心よりお慶び申し上げます。

平成19年度の主な活動は、8月4日に新潟市内のホテルにて第7回定時総会を、本部より、加藤木会長を



お迎えし開催しました。加藤木会長からは「2年後に120周年を迎え、卒業生が100万人に達し、校友会館が建設される」との明るい希望に満ちたご挨拶をいただきました。また、今回は役員改選期で、私が支部長に選任されました。鈴木前支部長の指導の下で、微力を尽くして頑張りたいと思っています。

終了後は、父母会との合同で懇親会を行いました。恒例となった校歌、応援歌、日大節などに声を張り上げたりと、和気藹々の一時を過ごしました。また、10月8日には阿賀高原ゴルフ場に於いて懇親ゴルフ大会を開催し、岩名涼さん（土木22回卒）が初優勝を飾りました。

“北陸支部”といっても、新潟県の会員がほとんどです。来年は近県の同窓生が集まる“北陸支部”を目標に、努力したいと思います。

何卒今後ともよろしくお願い申し上げ、活動報告と致します。

東海支部活動報告

土木15回卒 東海支部長 川村 智健

支部の最大の動きと言えば、静岡県支部会員が、都道府県単位で初のケースですが、4月21日（土）開催の工学部校友会総会において「東東海支部」への昇格が承認され、当支部から独立したことです。

当支部の活動は、5月26日（土）に鈴鹿カントリークラブで開催したゴルフ大会（優勝：高田和典（電17回卒）。キャッスルプラザホテル7月20日（金）にて開催した支部総会。工学部校友会会長・加藤木研様、工学部次長・依田満夫先生、東東海支部・永田進様を来賓としてお迎えし、真言宗智山派別格大本山大須観音貫主の岡部快圓様を講師に迎え「真理に生きる」と題して講演して頂きました。講演内容は「生きているのではなく生かされているのだから、万物に感謝して生きていく」ことの尊さを教えられました。

そして、12月7日（金）の忘年会。

変わり映えのしない支部活動でしたので、この誌面をお借りして、大成功を収めた愛知万博「愛・地球博」の会場の跡地についてお知らせを兼ねて記述させていただきます。当初、瀬戸の海上地区で開かれる予定が、昭和45年に青少年の健全育成を目的に県条例により設置した「愛知青少年公園」をメイン会場として開催されることになりました。これを契機に21世紀にふさわしい公園にすることとし、都市計画決定がなされました。

公園整備は博覧会前と博覧会後に分かれ、パビリオ



ンが建たない森のゾーンは、博覧会期間中にも利用できるよう主として日本庭園を中心に先行整備されました。博覧会後の公園づくりは、大成功を収めた博覧会の理念（自然の仕組みを学び持続可能な社会を創生すること）と成果（環境と交流）の継承を重点的に行う場として「アイデアの広場」との位置づけをし、整備することになりました。

サツキとメイの家と日本庭園、そして「こどもの広場」を中心にした児童総合センター、愛知国際児童年記念館等を2006年7月15日に、供用開始しました。開催期間中、迎賓館・レセプションホールとして利用した建物は「愛・地球博記念館」として参加国などから寄贈された記念品等を展示してあります。テーマ「自然の叡智」から連想される「匠、奏、創、恵、彩、敬」の6つのテーマに分類して展示されています。博覧会のテーマ館で、冷凍マンモスの展示とNHKのスーパーハイビジョンシアターなどが設置された「グローバルハウス」は、従前施設の「温水・スケート場」に復元され、共に2007年3月25日に供用開始されました。

アイデアの広場にこれからつくられる「地球市民交流センター」は、市民センター本体と体育館とで構成され、太陽光や地中熱などの自然エネルギーを多用しているのが特徴で、井水利用で空調エネルギーの3割を賄うなど、様々な環境技術を用い、環境と交流をテーマに愛知万博の理念と成果を発展させる拠点を目指しています。

ものづくりで活気のある愛知へ、そして21世紀にふさわしい公園に生まれ変わろうとしている「愛・地球博記念公園」（愛称「モリコロパーク」）を見に、是非来てください。工学部同窓は言うに及ばず、大学の同窓者一同が、皆様方を温かく「おもてなし」をいたすでしょうから。

東東海支部(静岡アカシア会)報告

土木27回卒 会長 大澤俊幸

念願久しかった支部昇格が、工学部校友会並びに東海支部の御理解を得て校友会総会で承認されてはじめての総会・懇親会が平成19年7月6日(金)浜松市で開催されました。

本部からは加藤木校友会長、東海支部より川村智健支部長、学部より土木工学科主任長林久夫教授さらに、西部地区を中心に遠くは東部・伊豆、中部地区から校友90余名の出席をいただき盛会に開催されました。いつもながらの口コミで、はじめて西部地区の総会であり心配しましたが40年にわたる藤原正臣先輩(土木6回)を中心とした県土木部の熱い思いの本会の伝統のおかげだと思います。今後とも父母会との連携、校友会唯一の職域支部・アカシア教育研究会との強い連携を保って後輩諸君の就職活動の支援、優秀な高校生の工学部進学PRも含めて今まで以上に活発な活動を推進する覚悟であります。校友会並びに学部当局の大きな御支援をお願いする所存であります。伝統の西部地区「あかしや会」の実績と、校友の熱い心により20・30代の若い校友の出席もあり大変実のある支部昇格のスタートが出来ました。今後は県下、東・中・西部の3地区を持ち回りで開催、平成20年度には東部地区で開催されます(8月頃予定)ので特に東部地区の校友の皆様の御支援・御協力をお願いいたします。



四国支部活動報告

土木25回卒 四国支部事務局 山口 恭平

日本大学工学部校友会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。昨年の支部総会は、高知で開催されましたが、本年度は、7月28日(土)本部より加藤木会長をお迎えして、四国支部会員30余名参加で開催しました。今回は交通の便を

考慮し高松駅近郊のホテル「ニューフロンテ」で行われました。

総会では、会則と役員の変更があり他の支部の動向も参考に、県単位での活動を図り易くするため会則を変更し、また支部長、事務局等の若返り目指し一部役員改選となりましたが、原案通り承認され、総会は無事終了いたしました。その後懇談会に移り、北岡支部長(工化14卒)の挨拶に続き谷久顧問(土木8回卒)の乾杯で会が始まり、加藤木会長から校友会と大学の状況を報告いただき、郡山での生活や思い出話で盛り上がりしました。また恒例の自己紹介では、六車新支部長(土木16回卒)の就任の挨拶と今後の運営についての熱い毒舌が始まり、興味津々に聞き入りました。最後に定番の日大校歌、若きエンジニアの歌を熱唱し、愛媛県から出席の稲田先輩(電気16回卒)の一本締めで閉会となりました。

四国支部では、毎月第1木曜日PM6:30より一本会(懇親)を開催しています。

場所「半分」(高松三越の東) TEL.087-821-7856

新卒業生、四チヨン族(四国内、単身赴任の卒業生)多数校友の皆様のご参加をお待ちいたしております。

四国支部事務局

連絡先: 山口(土木25回卒) TEL.087-874-2580

高知分科会事務局

連絡先: 川村(機械10回卒) TEL.088-833-3007

九州支部活動報告

建築28回卒 九州支部長 上村 公仁隆

九州支部の活動報告ですが、例年通りに、毎月の第3水曜日のアカシア会は休まず開催しましたが、今年は建築基準法改正により建築関係者が多忙を極めたのか、いつもより参加者が少なかったような気がします。9月21日金曜日に工学部校友会九州支部の総会を開催しました。昨年は月末に日程を設定したためか、参加者が少なかったのですが、今年は県外参加者には交通費を支給することにして、参加を呼びかけました。長崎県、佐賀県からの参加がありました。大分県にも声をかけて、出席の意向を聞いていたのですが、日程の都合がつかなかったようで欠席の返事が来ました。それでも昨年の2倍の30名の参加になり、賑わいました。

今年再開した行事として、白秋祭の参加があります。11月2日に北原白秋の生誕の地である柳川で行われた白秋祭に、地元の校友のお世話により、船を貸切り

で柳川の川下りを楽しみました。校友の家族も参加して、おおいに盛り上がりました。九州支部では各県の校友の情報を集めています。オール日大の集りやさまざまな職種の集まりの中で工学部卒業生にお会いした時は話も弾みますし、是非アカシア会や支部総会に来て下さいと誘っています。その声かけで来て頂いたときは喜びもひとしおです。これからも工学部の校友会の輪が広がっていく事に努力したいと考えています。



支部報告・アカシア教育研究会

建築22回卒 会長 永田 進

本会は、会員相互の親睦・交流はもとより、後輩の育成そして、少子化の影響で大学冬の時代と呼ばれているように、我日本大学も、安心している時ではありませんので、全国にいる会員の総力を結集して、優秀な教え子を母校に送るようという事も含めて、活動を行っております。幸い会員の協力で各地区で支部結成の動きも出ており、さらに後輩の育成については、学部教職教室の御努力と、会員の皆様の御支援、御協力で、各都道府県で新規採用の報告を受けております。

さらに入試状況においては、工学部はもとより、日本大学全体に視野を拡げ、又、会員校が常日頃お世話になっている、道都大、金沢工大にも協力体制を結んでおります。

◎ 青森支部結成

平成19年10月13日、ホテル青森にて、青森県内在住の高校教員が集まり青森支部を結成いたしました。急な連絡でしかも平日にもかかわらず、県内各地より、ほとんどの会員が集まっていただきました。会では、土木工学科主任、長林久夫教授より大学の現状をお話いただきました。席上、支部長には大山由紀夫（建29回）、幹事長には滝沢安弘（建38回）を選出。来年度は津軽地区で開催することになりました。

◎ 教職特別講演会

後輩育成の一つとして、教職教室主催の講演会に協力をさせていただいております。平成19年12月1日（土）、青森県立青森工業高校、白川公正校長先生（青森県高野連会長）に「高等学校が求める教師像」と題して御講演を御願いたしました（下記福島民友参照）。先生は、文理学部体育学科を御卒業後、請われて、県立三沢高校野球部監督に就任。その後、青森高校等を経て、青森工高校長に就任。青森県高校教育の発展に多大な功績を残されましたが、一方日本大学の先輩として後輩の育成にも、御尽力いただきました。



日大から芥川・直木賞作家を



機械15回卒 近藤義明

毎回、校友会報を読んで後輩諸士ががんばっておられる旨、嬉しく存じます。小生は大学を卒業して早40年が経ちますが、その間いろいろなことがありましたので、少し記してみたいと思います。

大学を卒業後、1年余り日本の企業で仕事をして、カナダのトロントへ働きに行きました。カナダでは新聞広告で自分の業種にあった会社に電話をして、面接に行き、OKならば働くことができます。当初は英語が上手く喋られず、なかなか思うような仕事に就けず苦労しました。収入を得るために機械工をしたり、機械部分の検査などをして、最後には金型の設計をしていました。1年半働いた後、日本に帰国しました。その当時、トロントの下宿で一緒だったカナダ人と今でも近況を報告し合っています。

日本に帰国後は化学プラント・公害防止装置の会社で5年間ほどサラリーマンとして働き、大手企業に吸収されるのを機会に独立しました。

社名はアクメ・エンジニアリング

(ACME Engineering)、Architecture (建築)

Civil (土木)、Chemical (化学)

Mechanical (機械)、Electrical (電気)

とACMEの4文字の中に、工学のすべてが含まれている。アクメ・エンジニアリングの業務は、化学プラント・公害防止装置・自動省力化機器の設計・据付・試運転まで行い、製缶・配管や電気などの工事は外注。化学プラントは日本鋳業(株)では銅を精錬した後の液を濃縮させて、硫酸銅の結晶を作る装置(袋詰めして農薬として売る)。住友金属工業(株)ではボイラーの排煙を脱硫・脱硝した液から不純物を取り除き、真空濃縮して硫酸ナトリウムの結晶を作る装置(石鹼や磨りガラスに利用)。これらの装置では蒸発缶(減圧)・加熱缶(圧力容器)・エジェクター(真空発生器)・配管・架台等の設計が必要。公害防止装置では凝集沈殿や活性汚泥法を組み込み、札幌から五島列島(長崎県)と全国色々な所へ行きました。

また、鹿児島県と宮崎県へは県中小企業団体中央会の依頼で、地場産業の社長や工場長に講演もしました。

個人向けとしてはコーヒーメーカー、一台で「焙煎(コーヒーの生豆は白っぽい=生豆は何年でも日持ち

する)→ミル→ドリップ…20分で煎り立てのコーヒーが飲める」の設計をしました。それで、以前にはアクメの仕事で高額納税者(所得税が1000万円以上)になったこともありましたが、手元には現金がほとんど残りませんでした(残ったのは紳士録や、高額納税者リストの購入ハガキだけ)。そのときは日本の税制に疑問を感じ、海外で働くことも考えたほどです。

プラントの仕事は客先から求められれば、10年はメンテナンス(工場を止めるわけにいかないため)等で面倒を見なければなりませんので、還暦を前にして新規の仕事は取らず、今まで収めた装置・機器のメンテ(含む技術相談)と薬品供給をしています。

それを機会に何か残るものはないか?と考えて本を書きました。

嵐山泊(らんざんぱく)

亜久米円二(ペンネーム)

新風舎刊

嵐山泊は図書館に寄贈しました

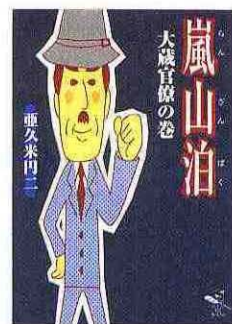
。嵐山泊を読まれて、「もっと面白いものが書ける」と言う人が出てくることを望みます。早稲田や慶応ばかりに芥川・直木賞を取らしてはならない。日大生の試金石にならんがためにも嵐山泊を書いてみました。

学生諸君に言いたい。工学部といえども本をたくさん読んで『読解力』をつけないと損である。なぜならば、会社に入ると色々な書類を読んだり、書いたりしなければならないから。だから、学生の間は年間100冊の本を読むことを目標にして1・2年生はただ読み、3・4年生になると読みながら何か(小説でなくても可)を文字として表現すれば、学校を出てからの人生がより良い方向に向く。但し読んだからと言って、残念ながら直ぐには効果が出てこないが、必ず効果あり。本は図書館の利用を!

嵐山泊を読んでその批評をお聞かせ願えれば幸いです(そのときに、どこが面白いとか、面白くなかったと、忌憚なきご意見を場面と一緒に教えてください)。

なお、ペンネームはお気づきだと思いますが、弊社名を転用しました。また、嵐山泊の中に何人が登場人物が出てきますが、アメリカの州を名前当てに嵌めました。何人の人物名を当てるかナナー(正答者には抽選で10人にサイン入り嵐山泊を送ります)。

先輩・同輩・後輩諸士で「嵐山泊ってどの程度の本



かな？一度読んでみたら」と思われる方は、全国の大きな書店（紀伊國屋書店、ジュンク堂等）か、インターネットではアマゾンジャパン（<http://www.amazon.co.jp/>）、楽天ブックス（<http://books.rakuten.co.jp/>）、セブンアンドワイ（<http://www.7andy.co.jp/>）

帽子との別れ



工化20回卒
オーベクス株式会社
代表取締役社長 **大竹 信行**

昭和47年3月、郡山駅より上野行きの急行列車に乗り、生まれ育った郡山の地を後に一路東京へと向かった。内田先生から紹介された東京帽子株式会社（現オーベクス株式会社：昭和60年に社名変更）へ就職するためである。上野駅からは今は懐かしい都電にのり、約一日がかりで会社に着いた。そのまま会社の敷地内にある独身寮に入り、翌日より入社前研修が始まった。長いサラリーマン人生の始まりであった。

月日の経つのは早いもので、以来36年が経過し、いまだにサラリーマンを続けている。入社後に配属された部署は、新規商品の開発を行う研究開発室であった。当時のわが社は、工学部出身の学生を毎年採用しており、私が入社した昭和47年4月時点でも、工化4名、電気1名の先輩諸氏が各部門の第一線で活躍しておられ、日々指導して戴き、大変お世話になった。その後、製造、営業、子会社への出向等を経験し、平成19年6月に社長に選任され現在に至っている。

東京帽子株式会社は、社名に表すとおり、日本で最初の帽子メーカーとして1892年（明治25年）に創業し、そのブランド「トーキョーハット」は、昭和天皇や政財界の重鎮に広く愛用され、東京オリンピック日本選手団の帽子にも採用されたことがある。

わが国へ初めて洋式帽子が伝来したのは、オランダ人が織田信長に献上したのが最初といわれているが、記録としてはっきりしているのは、1793年（寛政5年）江戸中期の徳川11代将軍家斉のとき、仙台出身、幸太郎と磯吉という二人の漂流民が、ロシアの衣服と帽子を身に着けて、祖国日本へ戻ってきた時による。取調べの役人の記録によれば「黒い氈笠（フェルト帽子）を持ち帰った」とある。明治の世になり、明治4年、新政府の太政官は散髪脱刀勝手令（いわゆる断髪令）を發布、1873年、明治天皇は国民に範を示すために、率先して髪を切ったので、一般市民もようやく髷を切るようになり、1884年にバリカンが輸入されると、国民

から購入することができます。

学生か定年退職者で時間に余裕のある方は、一度本を書いてみられたら？仕事で得た技術的な経験や発想で本にするのも面白いと思う（例えば、海外勤務の長い人、大企業で役員までなった人、誰もしていないような変わった研究をした人等々）。

の9割はザンギリ頭となった。1883年（明治16年）、東京麹町に鹿鳴館が落成、ここに内外の高官や紳士・淑女が集まり、時代の先端をいくパーティが開催されたが、参集者はすべて洋装だったから、男女とも帽子は欠かせない必需品であった。これに刺激されて、一般人にも文明開化の象徴としての帽子は広く行き渡った。当時の、山高帽、中折れ帽、烏打帽、トルコ帽等はほとんどが舶来物（輸入品）であり、高価なものであった。そこで、日本資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一を中心とした財界人らが、舶来帽子に勝る純国産品を製造することによって、過大な輸入を防止し、併せて国策にもかなう工業化と経済的自立を図ろうとする目的で、日本最初の製帽会社が設立された。このような歴史的背景により誕生したわが社も、時代とともに紳士用帽子をかぶる習慣が廃れたうえ、事業多角化で手掛けた紳士衣料事業も競争激化で業績が悪化し、2007年3月末をもって撤退を余儀なくされた。115年続いた「トーキョーハット」ブランドが消え去るのは断腸の思いであったが、幸いに帽子事業の譲渡先が見つかり、渋沢栄一がつくったブランドの歴史は続くことになった。

創業の原点である帽子事業は失ったものの、昭和30年代中頃より手掛けたサインペン先（フェルトペン他）事業や、サインペン先の製造技術を生かした医療機器事業が順調に推移しており、今後はこの二つの事業を核として新たな成長を目指していくこととなった。創業者である渋沢栄一は、企業の発展は「論語と算盤」すなわち倫理と利益は両立する（道徳・経済合一説）と唱え実践した経営者であったが、わが社の経営理念にも、この渋沢イズムが継承されている。昨今の経済情勢は予断を許さないが、工学部出身OBとしての名に恥じぬよう、企業人として経営に携わっていきたいと思っている。





自分の可能性を信じて…

機械53回卒 木村旭厚

社会人となって3年目の春を迎えたとき、私は1つの決断をしました。それは、全日本ロードレース選手権にフルエントリーするということです。全日本ロードレース選手権とはその名の通り、日本全国を転戦し日本一のライダーを決める選手権です。

大学の時に所属した機械研究会で初めてバイクのレースというものを体験して以来、夢中になり、プロレーサーという夢を追いかけていました。大学卒業後も社会人として働く傍らレーサーという夢を追いかけていました。そして、2006年シーズンにもてぎロードレース選手権、SUGOロードレース選手権でGP125クラスのチャンピオ

ンとなり2007年は念願の全日本ロードレース選手権に出場することができました。

昨年はクラスをコンバートし（GP125→GP250）、全日本という新しいレベルのカテゴリーということで、悩んだり苦しんだりすることが多い年でした。それでも、後半は環境にも慣れ始め、前を向いて戦えるようになったと思います。まだまだ勉強することはたくさんありますが、それはまだまだ上を目指せることと感じ、自分がどこまでいけるのか自分自身や応援してくださる方を信じ出来る限り戦い抜きたいと思っています。

また、今年はメカニックとして日本大学工学部に在学する石森君と大嶋君にも手伝ってもらいました。彼らは「すごくいい経験になった」と言ってくれていて非常にうれしく思います。確かに、全日本ロードレース選手権はお客さまから入場料をいただいて行う興行レースである以上、エントラントはプロということで、現場には独特の緊張感があふれています。このような環境に身を置き、感じてもらうことで今後の社会人としてのスタートをうまく切れるのではないかなと期待しています。

最後に、今年からは日本大学工学部校友会の皆様からサポートをしていただくこととなり、昨年以上に気合が入っています。今後、皆様に良い結果を報告できるよう精一杯精進してまいりますので応援よろしく願います。

校友会に寄せて

機械19回卒 長野県信濃町町長 松本重博

私、平成18年11月19日の長野県上水内郡信濃町の町長選挙にて当選し、11月28日に第六代目の町長に就任いたしました。もっと早くに近況報告をすべきだったのですが、「大したこともない私事で校友会の皆さんに連絡するのも…」と思い、今日まで来てしまいました。しかし、思い返してみると「勤務先が変わったときには連絡を」と以前言われたことと、「私に便りを送れよ」といっていただいた方が、私の背中を押してくださったのです。まもなく1年を迎えるわけですが、今まで生きてきた環境とは一変し、戸惑いつつも新天地で頑張っております。12年ほどで脱サラし、IT関連の小さな町工場を興すとともに、在学中にゲレンデスキー同好会を結成した気持ちをそのまま社会人になっても持ち続け、町のスキークラブでジュニア育成に情熱を傾け、信濃町で初めてのアルペンにおけるオリンピック選手を育て、長野県スキー連盟競技運営技術員も終えて、これから好きな遊びでもしようかなと思っていた矢先の出馬で、ここに来て大変な任務に就いてしまいました。現在会社は家内に任せ、もっぱら新米町長一年生として孤軍奮闘の毎日

です。しかし入庁してみて嬉しかったのは、日大出身の職員が大変多いことでした。小さな100人ほどの役場ですが、2~3人ほどはいるであろうと思っていました。しかし調べてみたところによると7人もの人が居り心強いことです。

国の三位一体改革や財政健全化法の制定により、地方の自治体の財政状況は危機的といっても過言ではないほど逼迫しております。自分が生まれ育った郷土を何とか発展さすべく、又、山紫水明のこの地を守り抜き、安全で安心して暮らせる街づくりを進める決意で残りの人生をささげてゆきたく思っております。晩秋の信濃路は、里の紅葉と黒姫、戸隠、妙高の峰々の冠雪のコントラストがとても美しく、特に朝夕は凛とした気に包まれています。郡山も今頃の時期になるとそろそろ底冷えの季節になってきていることと思います。学生時代が懐かしく思われます。

向寒の折、大学の皆さん、校友の皆さんのご健勝を祈ると共に、皆さんの更なるご発展を念じつつ、報告までとさせていただきます。

祝 瑞宝小綬章



土木工学科第3回卒業
根本 亮

○経歴

昭和29年度
昭和30年
昭和60年
昭和63年
昭和64年

土木工学科卒業 国家公務員上級職合格
千葉県庁土木部入庁。各土木事務所長を経て、
土木部技監、東京湾横断道路着工に貢献。
千葉県企業庁地域整備部長、幕張メッセ始めとして幕張新都心整備に責任者として関わる。
企業庁長就任。平成3年まで企業庁の事業（街づくり、工業団地の造成、工業用水）
全般の管理者として活躍。
県を退職し、かずさアカデミアパーク社長就任。
日本最初のD.N.A.研究所の設立に関わるほか、先端産業誘致の為に基盤整備に関わる。
退社まで約半世紀に亘って千葉県の社会整備に貢献。
地方自治功労者として瑞宝小綬章の叙勲を受ける。

平成3年
平成13年
平成19年



叙勲祝賀会にて（祝宴）

新学部長 出村克宜教授紹介

平成20年4月より新学部長となられる出村克宜教授をご紹介します



○生年月日

1954年2月17日茨城県生まれ

○学歴

昭和51年（1976）3月 日本大学理工学部建築学科卒業
昭和54年（1979）3月 日本大学大学院工学研究科博士前期課程修了
昭和56年（1981）1月～ 1年間 The University of Texas at Austin 留学
昭和57年（1982）3月 日本大学大学院工学研究科博士後期課程修了（博士号授与）

○職歴

昭和57年（1982）4月～ 日本大学助手
昭和63年（1988）4月～ 同講師
平成7年（1995）4月～ 同助教授
平成12年（2000）4月～ 教授（2001年4月より3年間、建築学科主任教授）
（2004年4月より、建築学専攻主任）
（2005年4月より、工学部学務担当）
（2005年9月より、日本大学評議員）

○賞罰

昭和56年（1981）5月 日本材料学会昭和55年度論文賞受賞
平成16年（2004）10月 第20回都市公園コンクールにて、国土交通大臣賞受賞
（日本大学工学部及び福島県雨水活用事業協同組合）

工学部校友会賞を3名の卒業生に贈る

在学中の顕著な活動に対し、校友会賞及び副賞として懐中時計を贈ることを決めた。授与は卒業記念パーティーの席上で行う予定。

- 日本大学工学部学文連委員長
渡辺 剛（電気電子・4年）
- 日本大学工学部学体育委員長
遠藤和彦（機械・4年）
- 平成19年北桜祭実行委員長
大竹崇裕（情報4年）

校友会卒業記念パーティー協賛金を工学部へ贈る



平成20年2月28日

日本大学工学部創設六十周年記念事業資金校友寄付者御芳名

(敬称略・平成19年2月1日～平成20年1月31日)

土木	井野川伊曾二	25 佐藤松寿	19 坂本和夫	16 堀内洋幸	24 亀井秀樹
1 4 4 5 5 6 13 15 15 15 16 16 18 19 19 19 20 20 20 25	三浦津紀夫 鈴熊谷秀陽 佐藤勝一也 菅野重興市 黒須大彰一 田中日出興志 鈴渾宏英志 濁沼常昭雄 清栗同雄博 佐々木康博 野田優重 大柳直太郎 小柳直太郎 新藤敏一雄	26 藤下誠一 28 只野川 40 小高 41 建築 5 山崎代卓 11 矢代吉 13 大木隆次 14 鈴木哲 14 小幡日出 15 中村圭男 15 中村圭男 15 中村圭男 15 中村圭男 15 中村圭男 16 山松新宮 16 山松新宮 18 山松新宮	19 柳中幸吉 19 中樹美 20 井原マ 22 田松 22 笹島 25 齋佐前 25 齋佐前 32 齋佐前 32 齋佐前 34 齋佐前 35 機械 1 4 6 8 9 11 12 14 14 15 15 15	16 幸一吉得則夫之一毅淳朗史博信司治和郎郎三雄昭 16 田惠一文正巳博莊本田哲武孝裕幸榮廣次四修孝茂 20 久府方木喜邊井三重川原形澤橋崎林井辺齋 20 国佐森齊渡新與八隅菅尾唐三岡小荒堀渡安 22 22 23 24 24 25 27 32 32 35 35 35 38 47 電気 1 11 15 17 20 21	25 井田昭幸 26 長場之上尚直智 34 田之田口嶋 43 吉瀧田 44 工化 6 6 石部欽一郎 13 中山西三弘 16 山内大光 16 野尻木裕 25 青川崎 25 堀 32 団体 北心寮 北心会 建築15回生同級会 株式会社 片桐製作所

日本大学工学部校友会通信費寄付者御芳名

工学部校友会の財源確保の一環として、第55回卒業生へ通信費のご納入をお願いしたところ、以下のの方々よりご浄財を頂きました。ご芳名を記し感謝申し上げます。

(敬称略・平成20年3月7日)

土木	建築	寛隆平 也一紀 仁史明 宏明二	上朋 純友 慎太基 泰浩晃 友秀禎	手嶋 子田木 村坂沢 口羽上 井藤	井柏 金木 鈴中仁 半山 赤井石 伊	機械	小久 佐高 久吉 赤池 伊稻 浦大 河	寺米 藤橋 田田 津田 坂富 上場 野	博幸 昌弘 光政 裕一裕	一男 隼孝 子伸 行二 樹淳 絃哉 誠	電氣	佐菅 濱藤 御五 宮小 後高 七早 平	藤原 沖沼 堂十 本林 藤杉 草川 石	義康 裕賢 崇正 晃卓 和敬	展仁 孟均 介治 雄和 佑徹 磨志 幸	物化	松松 湯菊 岩小 金栗 鈴芹 永日 渡	生下 原地 崎景 賢田 木澤 井比 辺野	康智 康靖 一次 雄克 尚千 浩得	秀紀 平忠 涉郎 郎文 彰子 晴之 德	情報	吉田 大橋 森松 木山 谷澤 木常 木邊 村	貴敬 太太 宏孝 惠川 辰崇 耶大 博	之久 郎樹 浩美 潤悅 雄香 路勝 光

寄稿



千葉県安全・安心まちづくり推進協議会委員
銚子市危機管理懇談会委員
日本ガーディアン・エンジェルス 千葉地区本部顧問
柏駅周辺防犯推進協会 副会長
日本大学校友会本部 組織委員
アケアンCO.,LTD. 代表取締役

DARE TO CARE

見て見ぬふりをしない

[防犯ボランティアと私]

八木 宏純 日本大学工学部校友会 常任幹事
ニューヨーク校門会会員

思い起こすと17年前の1990年、ニューヨークでガーディアン・エンジェルの創設者であるカーティス・スリワ総理事長と、現在日本ガーディアン・エンジェルス理事長の小田啓二君に初めて出会ってから、私の防犯ボランティア活動が始まりました。それは、ガーディアン・エンジェルスがモットーにしている「DARE TO CARE」[見て見ぬふりをしない]という言葉に触れたからです。しかし、この言葉は今でこそ消え失せてしまったものですが、私にとって目新しいものではありませんでした。

私の少年時代には当たり前のようにありました。子どもたちの悪さを見かけると、地域の年輩者が声をかけ、悪さを止めさせました。また、誰も見てないとしても「お天道様」が見ているんだよと親は教えたもので、それらが非行の防止に役立っていたように思えます。

お天道様にはなれませんが、これからも年輩者として声をかけていこうと思っています。



「防犯ボランティアと私」購読ご希望の方は校友会事務局までお申込みください。実費(800円)にてお届けいたします。

平成20年度 通常総会通知

本会会則第14条により、日本大学工学部校友会平成20年度通常総会を下記の通り開催いたします。皆様には年度始めにあたりご多忙中とは存じますが、万障お繰り合わせの上、多数ご出席くださいますよう、ご通知申し上げます。

記

1. 日 時／平成20年4月19日(土)13時より
2. 場 所／日本大学工学部50周年記念館 (ハットNE)
3. 議 題／ (1) 平成19年度会務報告および決算報告
(2) 平成20年度事業計画および予算審議
(3) 役員の改選
(4) その他
4. 懇親会／総会終了後、大学関係者を迎えて懇親会を開催。

第28回 母校を訪ねる会

日 時／平成20年10月26日(日)

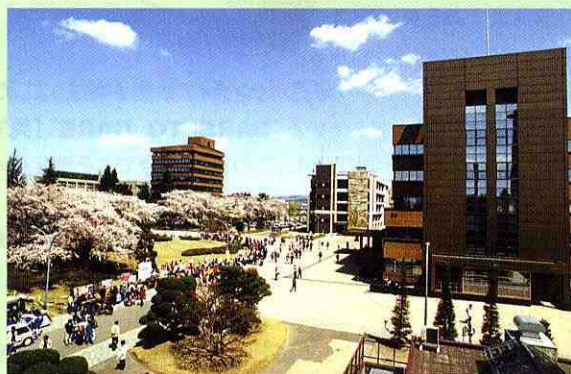
場 所／日本大学工学部50周年記念館
(ハットNE)を予定

対 象／第6回卒業生 (昭和33年3月卒業)
第16回卒業生 (昭和43年3月卒業)
第26回卒業生 (昭和53年3月卒業)
第36回卒業生 (昭和63年3月卒業)

今回は左記の卒業生が母校訪問の主たる対象となりますが、対象年度に関わらず、ご来校ください。大きく発展・成長した母校をご覧いただき、恩師や旧友との再会に懐かしい一時をお過ごしください。この日は第58回北桜祭開催中です。

なお、クラス会を予定されている幹事の方は校友会にご一報頂ければ幸いです。

校友会報 第71号



発 行 者 日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原1
郵便番号 963-1165
電話番号 024-944-1327
FAX番号 024-944-1327
E-mail : info@kouyu.ce.nihon-u.ac.jp
URL : <http://www.ce.nihon-u.ac.jp/kouyu>

発行部数 48,000部
発行日 平成20年3月1日
発行責任者 校友会会長 加藤木 研
編集責任者 編集委員長 長澤 幸二